

本号の記事はすべて、記者クラブメンバーの冬木記者によって執筆されたものです。冬木記者による、八幡堀まつりレポートをお楽しみください。

冬木記者による八幡堀まつりレポート その2

以身伝しんぶん

(記者 冬木)

町並み、それも楽しみ。

少し、歴史のお勉強になります。お付き合いくださいね。

近江八幡開町の祖・豊臣秀次。天正13年、新暦10月15日は豊臣秀吉封地の日付です。八幡が開町された日、10月15日を秀次顕彰として「八幡開町の日」と定められたとのこと。

八幡堀は、町の発展や近江商人の活躍に大きな役割を果たしてきました。

秀次公が築城の際に造られた八幡堀と町衆の430年の道のりと、文化自然環境の未来を「繋いで」いくための「八幡堀まつり」。今年10月13・14日におたつて開催されました。

平成最後の秋に、八幡堀周辺や町並み一帯はあちこちに灯りがともし、観光や住民の方々で華やかな賑わいを見せていました。

見所の一つ、白雲橋をはじめ遊歩道や石畳の小路をそぞろ歩く人々。

18色の色どりに次々と照らし出される白雲館。

日中に訪れる近江八幡の町とはまた異なる趣きを、皆さんそれぞれに楽しんでいらっしゃる様子でした。

筆者も、はじめて訪れる八幡堀まつりでしたが、次は取材ではなく、ゆつたりと町並みの散策を堪能したいと思いました。

ここでご紹介した写真よりも、もっと八幡城下町の情緒や祭りの活気に満ちた「八幡堀まつり」、実際に訪れて近江八幡の歴史も体感していただくと嬉しく思います。



町もちょっと装いを変えて、お祭りモード。浮かれ気分。

おまつり、食の魅力



湖国の水産、鮎のかほり…滋賀の滋味。

お祭りに出かけて、あちこち歩くとお腹も空きます。

やはり楽しみなのは、お祭り名物の食べ歩きですね！

近江八幡といえば、近江牛が真っ先に思い浮かぶ方が多いのではないのでしょうか？

もちろん、近江牛のステーキ・串焼きや近江牛握りのお店、ありまです！20歳以上で、車を運転してお越しでない方は地ビールや滋賀の銘酒と一緒に堪能してください。

いろいろと食べ歩きを楽しまたい方は、琵琶湖で獲れたて鮎の塩焼きもおおすすめです。鮎の焼けるいい匂いがするほうへ向かって歩いてください。

筆者もあちこちと歩き回って、とうとう空腹には勝てずに「あまな」さんで、あげういろなるものをいただきました。その名のとおり、いろいろな揚げたシンプルなのですが、一口大で食べやすく、揚げたての温かさとほんのりとした甘さが美味しく、歩き疲れを癒してくれました。

お土産には、人気のバウムクーヘンもよし、丁稚羊羹もおすすめです。

近江八幡ならではの赤こんにやくや丁字麩などの郷土料理もよいですね。

近江八幡の「故郷の味」で、心もお腹も満たしていただけることと思います。

最後に登場する人物は、取材中にお声かけくださり、八幡堀まつりのボランティア？として駆け回っていらつしゃった植山さん。

近江八幡にお住まいで、琵琶湖とウォーリングご夫妻をこよなく愛されています。

NOMAの記者クラブで、取材させていただいていることを伝えらると、滋賀県発祥の飛び出し坊や「とび太くん」と一緒にポーズを決めて写真撮影に応じてくださいました。名前・顔出しをどうぞよろしくお願ひしますとのこと！

近江八幡のどこかでお会いできるかもしれませぬ。

道案内も親切で、訪れる人とのふれあいも温かい。植山さんのようなサービスピス精神旺盛で、地域や琵琶湖を心から大切に尽力されている。

近江八幡の町は、NOMAをはじめ何度でも訪れたいくなる第2の故郷(ふるさと)になってくれる。

そんな気持ちになつた、郷土愛あふれる「八幡堀まつり」の取材でした。

お世話になった「八幡堀まつり」関係者の皆さま、ありがとうございました。



ボーダレス・エリア記者クラブInstagramアカウントはこちら
https://www.instagram.com/borderless_area_kisya_club